

言うときは、ここで言われるように、他人事のように言い、また思う。「常に」に作者の思いが読める。

今更に心奮はすことも無しフエイドアウトをわが美学とす
間宮清夫

「フエイドアウトをわが美学とす」という明快なメッセージのインパクトの度合い、の勝負だろう。「有終の美」とか「満塁逆転ホームラン」とかのドラマチックな終章をのぞまない、というのである。その美学そのものよりも、そういう美学にたどりつくまでの作者の人生のドラマに読者の興味は誘導される。

のけぞつて見るほど狭き秋の空　ビルの谷間の公園
にぬつ　桑野智章

都会の小さな小さな公園。何が起ころのか、読み進むうちに期待が増すような構成が魅力。ただ、結句の「……にぬつ」はいかが。無くてもいいわけで、最後に失速した感じがするのが残念。

ことされる古木の兆ひそやかに釣鐘ツリカネは幹のぼりゆく
蓬田真弓

結句「……幹のぼりゆく」が不気味な迫力を感じさせて、注目した。「ツリガネタケ」はよく倒木についているサルノコシカケの小さいような茸。

せせらぎの石を掴みし赤とんぼ蜻蛉には長きひと日
とと思う　加賀谷実

上句、小さな昆虫に心を集めている感じが出ていて、いい。「掴む」という動詞が赤トンボの力を入れた足先

をイメージさせるからである。ただ、現在形にしたいく、「掴みし」は「掴める」がいい。

引越の荷物解けず一箱に三年前の空気閉じこめ
新留紀代美

誰でも、どこの家でも、なんとなく何年も開けない箱や抽斗がある。ここは引越荷物。特に理由があるわけではないのだが、さしあたり不必要なのだろう。その箱の周辺だけ時間が止まっているような、奇妙な違和感。

撃たれたる熊に残つてゐるといふセシウムの量悲し
きろかも　本田一弘

射殺されたのは福島県の山に棲んでいた熊か。念のため死体のセシウムを計測した。ニュースでそれを知ったのだろう。福島を愛する作者の思いをストレートに表現した、そのストレートさが持ち味。「悲しきろかも」の「ろ」は感動を表す接尾語。悲しくて悲しくてたまらない意である。万葉集に用例がある。

古書並び白夜の如き薄闇を或るは吹き或るは黙せり
峰尾碧

一連を読むと、法要で集まった実家で、学者だった祖父の書齋をうたった作らしい。白夜のごとき薄闇に古書が並んでいる。本棚の古書たちが、それぞれ生き物のように感じられるというのである。いつでも書物と対話していた祖父の思い出が強烈なために、今でも、その書齋の書物が生き物のように感じられるというのだ。一首中の光のぐあい古い映画の一シーンのような感じ。